

〈研究ノート〉

# 和光大学の学生を対象にした コロナ禍での外出に対する意識調査

坂井敬子 SAKAI Keiko

- 問題と目的
- 方法
- 結果
- 考察

【要旨】本研究では、和光大学の学生を対象に、コロナ禍での外出についてどのような意識を持っているのか、個人差に焦点をあて検討することを目的とした。「コロナ禍での外出に対する意識」尺度が作成され、223名が回答を行った。因子分析により、「外出自粛へのネガティブ感情」「外出自粛へのポジティブ認識」「外出時の罪悪感」「外出時の感染不安」「外出時の平穏さ」「外出時の高揚感」の6因子が得られた。これら6下位尺度によりクラスター分析を行い、「外出不安群」「外出自粛享受群」「外出享受群」「外出葛藤群」「外出平穏群」の5タイプを得た。続いて分散分析により5タイプのストレス反応の違いが検討された。考察では、作成された尺度が測定する概念、外出に対する意識に関する5つの学生タイプの違い、ならびに今後の課題が議論された。

## — 問題と目的

コロナ禍は、大学生のメンタルヘルスに大きく影響しているといわれる。例えば2021年に行われた調査では、全国の国公私立大学の学長の8割が「学生のメンタルケア」を、6割が「学生の孤立化」を課題と考えていたという（朝日新聞、2021）。

コロナ禍が大学生の生活に与えたインパクトの中でも最も大きかったのは、外出が制限されたことではなかろうか。外出しないことは、感染防止には大きな効果を持つと期待されるが、人の生活を物理的・精神的に阻害する要因となる。「#大学生の日常も大事だ」というソーシャルメディアのハッシュタグは、コロナ禍当初の2020年に大きな注目を集めた。大学生のストレスに関する自由記述を分類した研究（住岡・和泉、2021）においては、約半数の学生が、移動や外出の制限を挙げていた。こうした制限状況が、大学生の孤独や孤立を高めてきた大きな要因であると考えられる。

しかし一方で、外出しない状況をむしろ享受しているといえるような学生たちの存在が

ある。例えば、内田・黒澤（2021）では、大学生の引きこもり願望が測定され、この得点が高いほど対面授業の希望度合いが低く、オンライン授業の希望度合いが高いことが示された。コロナ禍において大学生は一様ではなく、対立しうる意見やニーズがある（末木・村上・板橋，2021）ことの表れといえよう。コロナ禍がメンタルヘルスに与える影響については、こうした個人差を考慮すべき必要性が示唆される。

そこで本研究では、和光大学の学生を対象にして、コロナ禍での外出や外出自粛に対する認識の個人差を検討することを目的とする。そのためにまずは、コロナ禍での外出や外出自粛に対する意識を測定する尺度を作成する。次に、その尺度得点を基にクラスター分析を行って学生をいくつかのタイプに分類し、ストレス反応の違いを検討する。

なお、本研究では調査フィールドを和光大学に限定する。行う調査はあくまで標本抽出によるものであるが、フィールドを限定することで、プロフィールを参照しながらどのような回答者グループであるのかより明確にイメージを持つことができる。ひいてはより深い結果解釈や援助のヒントを得られると期待できる。加えて、今後も和光大学をフィールドにした調査の蓄積を行っていくことで、学生指導や支援にとって重要な知見となりえるだろう。

## ——方法

### 調査対象者と調査手続き

和光大学の学生を対象とし、心理教育学科専門科目2科目（ともにオンデマンド授業）の履修者、ならびに、心理学の研究法科目1科目の履修者の学内知人に調査を依頼した。いずれの場合も、調査はインターネット上のウェブ質問紙フォームで回答を求めた。倫理的配慮として質問紙フォームの冒頭に示されたインフォームド・コンセントにおいて、調査内容の概要と目的、無記名回答であり協力を強制するものではないこと、学術目的にのみデータ利用がなされることなどを説明し、同意した場合にのみ質問への回答に進むよう教示した。

なお、当該調査の回答者は、上記2科目の授業の履修者であれば、他の調査への協力や担当教員への報告など一定の手続きを踏んだうえで、調査協力に伴う加点評価を得ることができた。科目担当教員は、協力学生の回答内容を特定することは不可能であった。

### 調査時期と当時の状況

調査時期は2021年11月上～中旬であった。東京都における直前の緊急事態宣言が明けて1.5～2か月が経った頃であり、和光大学では、実習・演習などを中心に約半数の授業が対面により実施されていた。

### 調査内容

1. フェースシート：性別、年齢、学年、学科を尋ねた。また、重複回答チェックのため

に個人の電話番号下4桁の記述を求めた。

2. 「コロナ禍での外出に対する意識」尺度：本調査に先立って2021年10月に46名を対象に実施された予備調査で得られた自由記述を基に、14名の心理学を専攻する学部生と1名の心理学教員が項目案を作成した。外出について15項目、外出自粛について24項目を選定した(全39項目)。

回答は5件法とし、選択肢は「1：まったくあてはまらない」「2：あまりあてはまらない」「3：どちらともいえない」「4：すこしあてはまる」「5：かなりあてはまる」とした。

教示文は、外出自粛に関しては、「最も直前の緊急事態宣言期間\*において、あなたが外出自粛をしていた時の気持ちについてお尋ねします。下記文章のそれぞれについて、あてはまる選択肢を1つずつ選んでください。【全24項目】 \*東京においては2021年7~9月のもの。地域によって実施の有無や期間に違いがありますが、ほぼ同時期のことについてお答えください」とした。外出に関しては、「先ほどと同じ緊急事態宣言期間において、あなたが外出した時の気持ちについてお尋ねします。下記文章のそれぞれについて、選択肢を1つずつ選んでください。【全15項目】」とした。

3. 「心理的ストレス反応」尺度(松浦・勝岡・脇, 2012)：上記2「コロナ禍での外出に対する意識」尺度との関連性を確認するために用いた。下位尺度は、「抑うつ感」「易怒感」「身体不調感」「疲労感」の全12項目(回答は4件法)であった。教示では「日頃どのように感じ」ているかを尋ね、緊急事態宣言時を回想させたものではないが、コロナ禍での外出に関わる不安感や閉塞感を反映する下位尺度と正の相関関係を示すと予想された。

## 分析対象者

重複回答や不備回答を除いたうえで223名の回答を分析の対象とした。平均年齢は20.0( $SD=1.4$ )歳であった。学年内訳は、1年生70名、2年生79名、3年生57名、4年生16名、他1名であった。性別内訳は、男性113名、女性105名、その他5名であった。学科内訳は、心理教育学科79名、現代社会学科16名、身体環境共生学科2名、人間科学科14名、芸術学科15名、総合文化学科35名、経済学科29名、経営学科32名、その他1名であった。

なお、本研究における分析には、清水(2016)によるHAD(Ver.17)を使用した。

## —— 結果

### コロナ禍での外出に対する意識尺度の因子分析

まずは、外出自粛時に関する24項目について探索的因子分析を行った(最尤法、Promax回転)。固有値の減衰状況と因子の解釈可能性から因子数を2に設定した。複数の因子に

|.400| 超の因子負荷量を示した項目がないことを確認し、因子分析を完了した (Table 1)。

第1因子は、「社会とのかかわりが無くなってひどく寂しかった」「思ったように行動できず、すごく不満だった」「できることが少なくてとても悲しかった」のように、外出自粛に対するマイナスの感情を表す項目が集まったため、「外出自粛へのネガティブ感情」と命名した。第2因子は、「外に出られなくても、趣味など好きなことに没頭できる時間がかなり増えた」「在宅時間が長くなり、コロナ禍前にはできなかったことがかなりできた」「コロナ禍により、自由に使える時間がかなり多く取れた」のように外出自粛に対するプラスの認識を表す項目が集まったため、「外出自粛へのポジティブ認識」と命名した。

下位尺度の合成得点は、当該因子への因子負荷量が|.400|超であった項目を対象として平均値により算出した。 $\alpha$ 係数、平均値 ( $M$ )、 $SD$  は Table 1 において因子ごとに示した通りである。内部一貫性を示す  $\alpha$  係数は第1因子から順に、.911、.704 であり、いずれも良好な数値と判断された。

次に、外出時に関する15項目について探索的因子分析を行った (最尤法、Promax 回転)。固有値の減衰状況と因子の解釈可能性から因子数を4に設定した。複数の因子に|.400|超の因子負荷量を示した項目がないことを確認し、因子分析を完了した (Table 2)。

Table 1 外出自粛時の意識に関する因子分析結果

	F1	F2	共通性	$M$	$SD$
第1因子：外出自粛へのネガティブ感情 ( $\alpha = .911$ , $M = 3.136$ , $SD = 0.929$ )					
2. 社会とのかかわりが無くなってひどく寂しかった	.792	.203	.505	2.964	1.315
13. 思ったように行動できず、すごく不満だった	.756	-.054	.616	3.345	1.312
9. できることが少なくてとても悲しかった	.749	.039	.533	3.166	1.327
8. 人と話す機会が激減して、気持ちがとても減入った	.741	.145	.461	2.969	1.383
7. 外に出られず、とても強い拘束感があった	.731	.023	.518	2.969	1.323
1. 行動が不自由で、ひどくもどかしさを感じた	.708	.025	.483	3.475	1.321
24. 外出が制限され、非常に大きなストレスだった	.663	-.203	.618	3.215	1.328
14. 外出自粛時でも、全く孤独は感じなかった	-.625	.072	.441	3.148	1.267
12. コロナ禍前と全く変わらなかった	-.620	-.235	.292	2.327	1.210
21. 自粛生活にかなり大きな疲労感があった	.597	-.177	.494	3.009	1.312
20. 外の世界から疎外されている気分を感じることは全くなかった	-.567	.147	.428	3.135	1.215
6. 在宅時間が増えても何も感じることはなかった	-.531	.154	.389	2.874	1.353
19. 好きにふるまっている人について見聞きするとかなり苛立った	.259	.120	.050	2.973	1.259
第2因子：外出自粛へのポジティブ認識 ( $\alpha = .704$ , $M = 3.013$ , $SD = 0.701$ )					
23. 外に出られなくても、趣味など好きなことに没頭できる時間がかなり増えた	-.012	.711	.515	3.668	1.184
11. 在宅時間が長くなり、コロナ禍前にはできなかったことがかなりできた	.082	.685	.419	3.090	1.305
17. コロナ禍により、自由に使える時間がかなり多く取れた	.076	.596	.315	3.785	1.134
16. 人と関わる機会が減少し、感染予防に大きな安心感を持てた	.104	.455	.170	2.812	1.040
15. コロナ禍でもさまざまなことに対するやる気を強く保てていた	-.127	.438	.265	2.744	1.163
10. 外出自粛により、自分や身近な人の命を守れていると強く安心できた	.228	.424	.133	2.794	1.120
5. 時間の余裕ができ、生活リズムを整えることができた	.092	.416	.143	2.197	1.207
22. 知らないうちにウイルスを運ばずに済み、危険性が無くなったと思えた	-.066	.379	.174	2.798	1.048
18. 外出自粛には完全に慣れたと思っていた	-.238	.373	.286	3.547	1.188
4. 家にいさえすれば、感染不安は完全に解消できた	.026	.306	.086	3.085	1.188
3. 感染者が多くても希望を強く持っていた	-.046	.298	.105	2.919	1.087
因子間相関					
	-.508				

第1因子は、「外出することにうしろめたさを強く感じた」「外に出ると、とても悪いことをしている気持ちに囚われた」「外出の予定や経験を、他人に話すことが強いためられた」といったように、感染拡大防止には望ましくないとされる外出をするうしろめたさを表していたため、「外出時の罪悪感」と命名した。第2因子は、「くしゃみや咳をする人がいると、不安を感じる事がかなり多かった」「不用意に物に触れたくないと感じる事がとても多かった」「たとえマスクをしていても、感染がかなり不安だと常に思っていた」のように、外出する際の感染リスクに対するおそれを表していたため、「外出時の感染不安」と命名した。第3因子は、「コロナ禍前と全く変わらない気持ちで外出していた」「コロナ禍だからといって、外出時に思うことは何もなかった」「コロナ禍の外出には完全に慣れて心を動かされることはなかった」と、コロナ禍であるにもかかわらずそれに心が動かされなかったということを表していたので、「外出時の平静さ」と命名した。第4因子は、「外出する機会には、いつもよりも気持ちがかかなり高ぶった」「外に出られることが嬉しくて嬉しくてたまらなかった」「コロナ禍前の外出に比べて、喜びや楽しさをかなり強く感じた」と、外出

Table 2 外出時の意識に関する因子分析結果

	F1	F2	F1	F2	共通性	M	SD
第1因子：外出時の罪悪感 ( $\alpha = .713$ , $M = 2.651$ , $SD = 0.857$ )							
2. 外出することにうしろめたさを強く感じた	.790	-.140	-.130	-.026	.581	3.004	1.161
14. 外に出ると、とても悪いことをしている気持ちに囚われた	.675	.026	-.030	-.044	.476	2.345	1.144
6. 外出の予定や経験を、他人に話すことが強いためられた	.556	-.006	-.016	.012	.321	2.996	1.286
10. 時短営業や営業自粛の店を見るたび、外に出たことを強く後悔した	.436	.089	.264	.241	.300	2.260	1.080
5. 自分が運んだウイルスで人に感染させてしまうことが、強い不安になっていた	.381	.366	-.038	.052	.545	3.220	1.260
第2因子：外出時の感染不安 ( $\alpha = .772$ , $M = 3.283$ , $SD = 1.034$ )							
1. くしゃみや咳をする人がいると、不安を感じる事がかなり多かった	-.132	.734	.002	-.024	.408	3.327	1.307
9. 不用意に物に触れたくないと感じる事がとても多かった	.024	.624	-.107	-.014	.492	3.386	1.254
15. たとえマスクをしていても、感染がかなり不安だと常に思っていた	.212	.617	.058	-.012	.548	3.135	1.308
13. 電車やバスに乗ることに、抵抗感はなくなかった	-.260	-.267	.209	.078	.359	2.798	1.263
第3因子：外出時の平静さ ( $\alpha = .823$ , $M = 2.737$ , $SD = 1.044$ )							
4. コロナ禍前と全く変わらない気持ちで外出していた	-.142	.097	.769	-.023	.649	2.605	1.258
8. コロナ禍だからといって、外出時に思うことは何もなかった	-.050	-.060	.760	-.048	.713	2.726	1.253
12. コロナ禍の外出には完全に慣れて心を動かされることはなかった	.123	-.073	.731	-.014	.512	2.879	1.131
第4因子：外出時の高揚感 ( $\alpha = .772$ , $M = 2.879$ , $SD = 1.000$ )							
11. 外出する機会には、いつもよりも気持ちがかかなり高ぶった	-.206	.119	-.103	.821	.687	2.758	1.225
3. 外に出られることが嬉しくて嬉しくてたまらなかった	.049	-.144	-.077	.696	.475	3.063	1.199
7. コロナ禍前の外出に比べて、喜びや楽しさをかなり強く感じた	.213	-.031	.089	.652	.523	2.816	1.196
因子間相関	Factor2	.695					
	Factor3	-.542	-.573				
	Factor4	.462	.442	-.344			

することへの強い喜びを表していたので、「外出時の高揚感」と命名した。

下位尺度の合成得点は、当該因子への因子負荷量が|.400|超であった項目を対象として平均値により算出した。 $\alpha$ 係数、サンプルにおける平均値 ( $M$ )、 $SD$ はTable 2において因子ごとに示した通りである。内部一貫性を示す $\alpha$ 係数は第1因子から順に、.713、.772、.823、.772であり、いずれも良好な数値と判断された。

2つの因子分析を基に算出された6つの下位尺度の合成得点について、男女差ならびに学年差を検討した。男女差について対応のない $t$ 検定を施したところ、「外出時の罪悪感」(平均値 $\pm SD$ : 男性 $2.522 \pm 0.813$ 、女性 $2.805 \pm 0.896$ )に有意な男女差がみられた( $t(209.9) = 2.433$ ,  $p < .05$ )。他の下位尺度において有意差は見いだされなかった( $t(213.9 \sim 215.9) = 0.355 \sim 1.319$ , いずれも  $n.s.$ )。1~4年生における学年差については、1要因の分散分析を施したが、いずれの下位尺度においても有意な差異は見いだされなかった( $F(3, 218) = 0.038 \sim 1.170$ , いずれも  $n.s.$ )。

### 妥当性の確認

松浦ら(2012)による心理的ストレス反応尺度の下位尺度「抑うつ感」「易怒感」「身体不調感」「疲労感」について、合成得点を平均値により算出した。平均値 $\pm SD$ は、抑うつ感から順に、 $2.499 \pm 0.891$ 、 $2.151 \pm 0.862$ 、 $2.749 \pm 0.878$ 、 $2.740 \pm 0.911$ であった。内部一貫性を示す $\alpha$ 係数は、順に $\alpha = .881$ 、 $.874$ 、 $.810$ 、 $.869$ でありいずれも良好な数値と判断された。

これらの下位尺度と、本研究で作成したコロナ禍での外出時/外出自粛時の意識尺度の下位尺度との相関関係は、Table 3に示したとおりである。心理的ストレス反応の下位尺度と有意な正の相関を示したのは、「外出自粛のネガティブ感情」「外出時の罪悪感」「外出時の感染不安」「外出時の高揚感」であった。心理的ストレス反応の下位尺度と有意な負の相関を示したのは、「外出自粛のポジティブ認識」「外出時の平静さ」であった(ただし、「身体不調感」との有意な相関がみられなかった「外出自粛のポジティブ認識」を除く)。これらの相関関係は予想通りであり、今回作成した尺度には妥当性があると判断された。

Table 3 コロナ禍における外出に対する意識と心理的ストレス反応(松浦ら, 2012)との相関

	抑うつ感	易怒感	身体不調感	疲労感
外出自粛へのネガティブ感情	.527***	.418***	.211**	.385***
外出自粛へのポジティブ認識	-.245***	-.277***	-.054	-.217**
外出時の罪悪感	.302***	.219**	.143*	.180**
外出時の感染不安	.378***	.180**	.203**	.263***
外出時の平静さ	-.248***	-.206**	-.204**	-.231**
外出時の高揚感	.337***	.250***	.142*	.194**

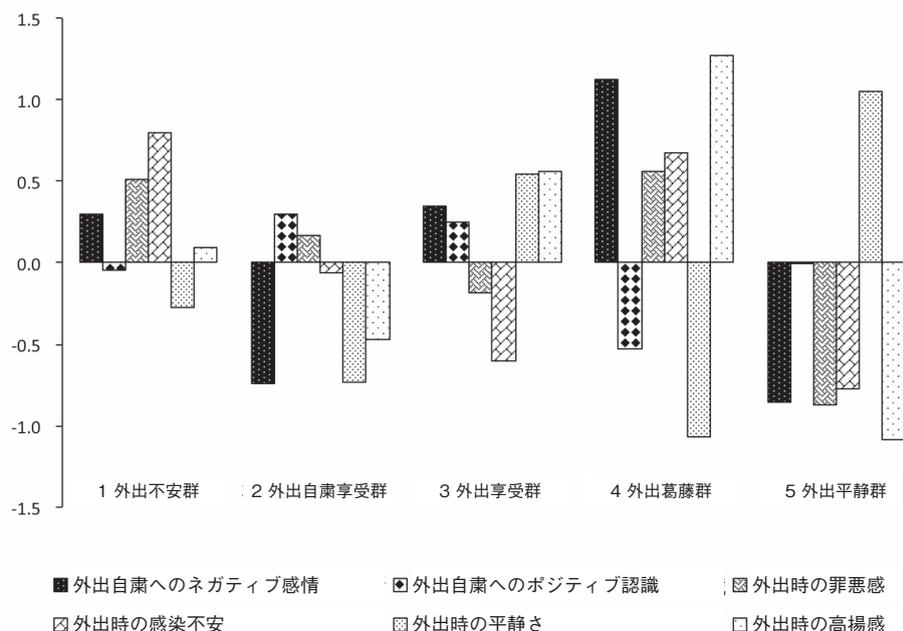
\*\*\*  $p < .001$  \*\*  $p < .01$  \*  $p < .05$

### クラスターによるタイプ分けと心理的ストレス反応の違い

今回作成した尺度 (5 下位尺度) により学生のタイプ分けを行うため、Ward 法によるクラスター分析を行い、解釈可能性から 5 クラスター解を採用した (Figure 1)。各クラスターの特徴的な下位尺度得点を挙げると、第 1 クラスター (57 名) では、外出による感染不安と罪悪感が平均よりも高い傾向にあった。第 2 クラスター (35 名) では、外出自粛に関する否定感情、外出時の平静さと高揚感が低い傾向にあった。第 3 クラスター (43 名) では、外出による感染不安が低い傾向にあり、対照的に、外出時の平静さと外出高揚感が高い傾向にあった。第 4 クラスター (35 名) では、外出による感染不安と罪悪感が高い傾向、外出自粛によるポジティブ認識が低い傾向にあるとともに、外出自粛によるネガティブ感情や外出時の高揚感が著しく高く、対照的に、外出時の平静さが著しく低かった。第 5 クラスター (53 名) では、外出時の平静さが平均よりも著しく高く、対照的に、外出時の高揚感が目立って低かったことに加え、外出時の感染不安と罪悪感、外出自粛のネガティブ感情が低い傾向にあった。このような下位尺度得点の特徴をふまえ、第 1 クラスターより順に「外出不安群」「外出自粛享受群」「外出享受群」「外出葛藤群」「外出平静群」と命名した。

次に、これらのクラスターを独立変数、心理的ストレス反応の 4 下位尺度を従属変数と

Figure 1 コロナ禍における外出に対する意識によるクラスター分析結果



した1要因の分散分析を行った。分散分析結果はいずれも有意となった(抑うつ感  $F(4, 218) = 14.228, p < .001$ ; 易怒感  $F(4, 218) = 6.090, p < .001$ ; 身体不調感  $F(4, 218) = 3.935, p < .01$ ; 疲労感  $F(4, 218) = 7.791, p < .001$ )。Holm法による多重比較を行い、クラスター間の差を確認した(抑うつ感 2, 3, 5 < 1, 4; 易怒感 5 < 1, 4; 身体不調感 3, 5 < 4; 疲労感 2, 3, 5 < 1, 4)。得点の平均を Figure 2 に示す。

## —— 考察

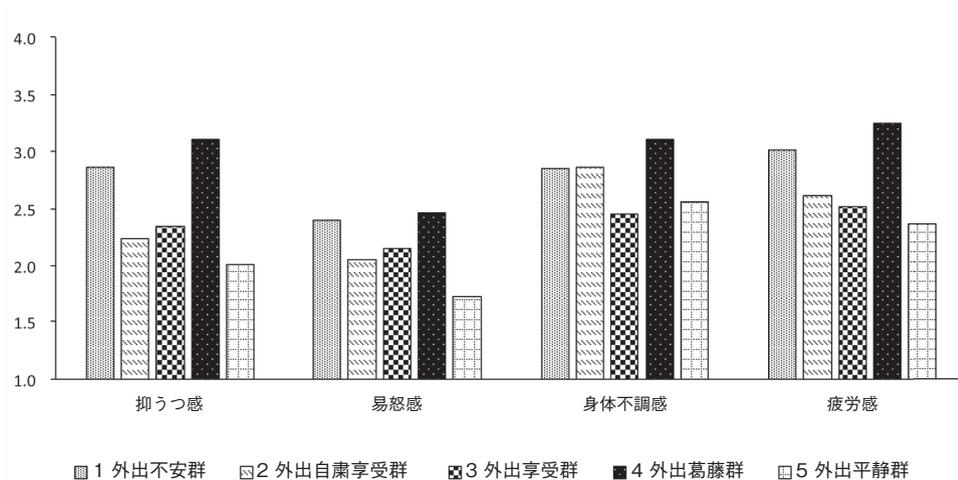
本研究の目的は、和光大学の学生を対象にして、コロナ禍での外出や外出自粛に対する認識の個人差を検討することであった。

まずは、コロナ禍での外出や外出自粛に対する意識を測定する39項目について、223名の回答を因子分析し、外出自粛に関する2因子、外出に関する4因子を得た。併せて、妥当性を確認するために、ストレス反応との相関関係を確認した。

ストレス反応と正の相関を示したのは、「外出自粛のネガティブ感情」「外出時の罪悪感」「外出時の感染不安」「外出時の高揚感」であった。ストレス反応と負の相関を示したのは、「外出自粛のポジティブ認識」「外出時の平静さ」であった。今回作成した尺度においてとらえたのは、コロナ禍での外出や外出自粛それ自体(ストレッサー)ではなく、それらに対する個人の感情や意味づけ、つまり「良い—悪い」「好き—嫌い」といった価値(ストレス認知)であり、予想された通りにストレス反応との有意な相関を確認することができた。これらは、例えば橋本(2021)において作成されたコロナ禍ストレッサー尺度とは区別される必要がある。

次に、コロナ禍での外出や外出自粛に対する意識の6下位尺度の得点を基に、クラスタ

Figure 2 心理的ストレス反応のクラスター差



一分析を行って学生を5タイプに分類した。併せて、クラスターによるストレス反応の違いについても検討を行った。

5群の中でストレス反応が最も高かったのが「外出葛藤群」、次に高かったのが「外出不安群」であった。両群で共通した特徴である外出時の感染不安と罪悪感の高さが、高いストレス反応を導いたと考えられる。「外出葛藤群」ではさらに、外出自粛に対して強いフラストレーションを感じポジティブに認識できなかったこと、外出時の強い高揚感や平時とは異なるという認識も、著しいストレス反応の背景にあったと示唆される。

上記2群に比してストレス反応が低かった残りの3群には、それぞれ下記のような特徴があったといえる。「外出自粛享受群」は、平静ではいらなかったが、外出自粛を否定的に感じていなかった。「外出享受群」は、感染不安をあまり感じず、外出を楽しんでいた。「外出平静群」は、外出時の感染不安や罪悪感など、緊急事態宣言時を特徴づける認識が顕著に低く、平静さが突出していた。

以上のように、ストレス反応尺度が相対的に高い者たち、低い者たちのそれぞれにおいて、一様ではなく多様なタイプの存在が示された。この知見はサポートのあり方にヒントを与えるものとなりえるだろう。しかし、ストレス反応の高低を以てただちに、彼ら彼女らの意識や行動の良し悪しを評価できるわけではないだろう。

本研究における課題と今後の展望としてまず挙げられるのは、今回作成された尺度項目における表現の汎用性である。項目作成では、「すごく」「とても」「非常に」など、程度を表現する副詞を多用した。それは、今回の調査のタイミング的に、こうした副詞を加えなければ、回答における天井効果が懸念されたためであった。しかし、今後、感染状況が刻々と変化する中では、それらの強い副詞表現が回答のしづらさや二極分化的な分布につながる可能性がある。

また、当然ながらサンプルの偏りを指摘しなければならない。和光大学の学生を対象を限定したとはいえ、協力の呼びかけは2科目の履修者にほぼ限定されており、結果の考察には慎重さが求められる。

こうして課題は残されたものの、本研究においては、コロナ禍において葛藤の源となる外出や外出自粛に対する大学生の意識を測定する尺度を作成することができた。また、その尺度得点によるクラスター分析により、コロナ禍での多様な学生像をとらえることができた。

#### 《文献》

朝日新聞 (2021). 大学の8割「学生のメンタルケアが課題」とくに心配なのは2年生 朝日新聞デジタル 2021年9月19日 <https://www.asahi.com/articles/ASP9K6R9XP80USPT00B.html> (2022年11月3日閲覧)

橋本 剛 (2021). コロナ禍初期における大学生の心理社会的ストレスに関する探索的検討—社会規範としての援助要請スタイルの効果も含めて— 人文論集 (静岡大学人文社会科学部), 71(2), 15-34.

松浦 沙織・勝岡 大貴・脇 龍平 (2012). 成人を対象とした心理的ストレス反応尺度の作成—信頼性と妥当

性の検討— 大阪経大論集, 63, 193-200.

清水 裕士 (2016). フリーの統計分析ソフト HAD—機能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における利用  
方法の提案— メディア・情報・コミュニケーション研究, 1, 59-73.

末木 新・村上 弘子・板橋 千晶 (編) (2021). 和光大学学生相談センター年報 第3号 (2020年度) 和光  
大学学生相談センター

住岡 恭子・和泉 里佳 (2021). 新型コロナウイルス感染症状況下における大学生の主観的ストレス 岡山  
大学大学院社会文化科学研究科紀要, 52, 11-27.

内田 知宏・黒澤 泰 (2021). コロナ禍に入学した大学一年生とオンライン授業—心身状態とひきこもり願  
望— 心理学研究, 92, 374-383.

付記：本研究は、2021年度和光大学現代人間学部心理教育学科の専門科目「心理学研究法  
A2 [質問紙法]」の主活動として行われたものである。履修者の氏名は列挙しない  
が、各自が積極的に取り組んだからこそ得られた知見である。

---

[さかい けいこ・和光大学現代人間学部心理教育学科准教授]